

京まち工房



SUMMER
情報交流誌

no.

19

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

京都市で、個性を生かした魅力ある地域づくりを目指し、区民と行政が一緒になって「各区基本計画」を策定してから1年半がたちました。現在、様々な主体のパートナーシップにより、各区の個性ある取組が行われています。

地域を振り返り、マップを作成することで魅力を再発見し発信している区や、地域の資源を生かした活性化を目指す区

など、地域に根ざした活動が様々に行われています。これらの取組によって、京都のまち全体の魅力が高まっていくことが期待できます。

ここでは、各区で取り組まれる事業や計画を進める仕組みについて、いくつかご紹介しますが、紙面の都合上、一部の区のみを紹介になることをご了承ください。

北区

各種団体の代表や、一般公募で選ばれたメンバーが主役となる「いきいき北区まちづくり推進会議」で計画の実施に向けた議論を行っています。「歩いて楽しいまちづくり」の一環として取り組んでいるマップの作成に向けて、古い道標の拓本をとって織物に仕上げられる西陣織の職人さんおすすめの道標や、犬と一緒に入れるカフェなど、ユニークなおすすめスポットを市民しんぶん(区版)で紹介しています。これらをまとめたマップは平成14年6月に発行の予定です。

左京区

計画の中から「大学のまち左京の推進」、「知られざる歴史的文化財の再発掘とまちづくり資源としての整備」、「北部地域の緑を生かした活性化」の3つを区民参加型事業として位置付けています。「北部地域の活性化を考える部会」では、少子高齢化、過疎化問題に取り組んでおり、区役所のプロジェクトチームと地域の方々と一緒に「左京北部まちづくり委員会」の設立を目指し、誰もがくらしやすいまちづくりや定住の促進などについて話し合っています。

東山区

区民と行政とのパートナーシップにより、計画を具体的に進める「東山・まち・みらい塾」。ここでは、地域でのまちづくりの担い手づくりを目指し、「車いすでまわる散策コースの設定」や「既存の道を活用し、東大路通と並行した歩行者向けの『東小路通』の設定」という二つのテーマに取り組んでいます。

各区の夢広がる まちづくり

右京区

計画を実現するための議論を行う「右京区まちづくり円卓会議」では、運営メンバーが公募されました。この会議は一般に公開されており、オープンでかつ対等に話し合える場を目指しています。計画の内容やここで議論したことを、広く区民に知ってもらうため、結成されたキャラバン隊が各学区に説明にまわります。

山科区

パートナーシップで計画を進めるため、地域の方々と共に「やましな21」推進会議を立ち上げ、躍動とふれあいのまちづくりに取り組んでいるところです。また、具体的な取組の一つとして、山科区内の公共施設や観光名所、山科の魅力等を紹介したマップを区内の大学の協力を得て、公募された区民委員で構成される「やましなマップづくり委員会」で作成しました。このマップは、区役所で無料配布しています。

下京区

計画をまちぐるみで進めるための企画やプロデュースをする「下京・町衆フォーラム」は、各種団体や企業、NPO等、幅広い方々によって構成されています。ここでは、計画の策定に関わった委員を中心として構成される「下京まちづくり懇談会」の助言や支援を受け、「下京門前町ルネッサンス」、「花いっぱい・まちの美化」の開催や、「下京情報の受発信」としてホームページやマップの作成等に取り組んでいます。

あなたのまちづくり拝見

植柳学区

寺内町として

植柳学区は、おおむね新町通、大宮通、六条通及び七条通の間の東西本願寺に挟まれた地域です。江戸時代から西本願寺の寺内町として、数珠や仏壇、法衣等のお店や工房、旅館等、参拝客や仏事関係者を対象とした生業を中心とした職住近接のまちとして賑わっていました。戦前には、お彼岸の日などに正面通に人が溢れるような時期もあったそうです。

連綿と引き継がれ磨き上げられた技や、信頼関係に支えられた生業は、現在も地域の活力の原動力となっています。

多様で多彩な取組

植柳学区では、高齢者への福祉の取組や、児童や小学生を対象とした人づくりにつながる取組等が、きめ細かに行われています。

高齢者、障害を持つ方を主な対象とした福祉の取組

(場所：植柳小学校他)

- 「昼食会」(月1回) 「交流昼食会」(年1回)
- 「配食サービス」(月3回)
- 「家庭訪問派遣」(利用者の希望日)
- 福祉施設へのボランティア参加(月2回)
- 「ふれあい交流の夏祭り」児童、高齢者、一般

子供を主な対象とした取組

(場所：植柳ふれあいサロン)

- 「温もりの日」、「安らぎの日」
- 「ふれあい学級」
- 「おもちゃライブラリ」 (各月1回)

9月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
食事・入浴介助	市民検診		廃油回収	食事・入浴介助		温もりの日
8	9	10	11	12	13	14
昼食会			ふれあい学級 配食サービス		献血	おもちゃ ライブラリー
15	16	17	18	19	20	21
敬老の日	振替休日		配食 サービス			安らぎの日 介護保険 講習会
22	23 秋分の日	24	25	26	27	28
			配食 サービス			自主防災教室
29	30	市民検診 9月 2日 献血 9月 13日				

「植柳福祉年間活動カレンダー」より

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するこのコーナー。

今回は、まちの元気や賑わいを高める多様な取組が、学区の方々に組織されている「植柳会」によって、「地域総ぐるみ」で行われている植柳学区を紹介します。



昼食会の様子

なかでも、長い間地域の人に親しまれている取組として、高齢者や障害を持つ人を対象とした昼食会があります。この取組は、高齢者問題への関心が今ほど高くなかった昭和55年、小学校の教室を借りて行うという地域福祉活動として始まりました。きっかけは、幼稚園で高齢者向けの昼食会をしているという新聞記事を目にしたことからでした。人と触れ合うことの減りがちな高齢者に、交流の場とバランスの取れた食事を提供したいとの思いから見学に行ったところ、植柳学区で実施するには調理や食事のために予想以上に広い場所が必要なことが分かりました。場所探しという暗礁に乗り上げたかに見えた取組を救ったのは、植柳小学校の協力でした。家庭科室は一汁三菜の調理場となります。保健室では、武田病院の婦長さんによる問診や血圧測定等の検診が行われます。食事は理科室でいただきます。約150人のお年寄りが植柳学区の温かさに包まれました。

遊びを通じて学ぶ

人づくりについてもユニークな取組がされています。「まちづくりを担ってもらう大人を育てるため、子ども達に教育をしています。世の中の仕組みを覚えて欲しいと思っています」と森澤会長は話されます。

「植柳ふれあいサロン」となっている小学校の一室、子どもたちにはコマや将棋、百人一首などの「昔の遊び道具」が準備されています。この場では、子どもたちは大人から遊び方を押し付けられることはありません。百人一首は神経衰弱ゲームなど、子どもたちが考えた独自の自主的なルールによって新たなカードゲームとして遊ばれます。子供たちは、自由に遊んでいるなかから、



高齢者と子供が遊びを通じて交流

自主性と創造性を自然と身に付けていきます。また、遊びを通じてルールを決めていくことを体験します。

こうして交流していく中で、子どもたちが道で会った人と恥ずかしがらずに挨拶できるようになったことは最大の成果です。

地域総ぐるみの取組

充実したきめ細かな取組ができているのは、地域の各種団体の垣根を越えた協力があるからです。ふれあい交流の夏祭りでは体育振興会の若手が主として取り組みますが、女性会や少年補導委員会、消防団等の団体も協力して取り組みます。また、こうした取組を支える多くのボランティアの方々がもうひとつの原動力となっています。新年会に高齢者を無料のお食事会に招待する旅館や病院などの協力、学校などの公的な組織の協力も忘れてはなりません。こうした、地域総ぐるみの協力により、昼食会、配食サービス、家庭訪問派遣やふれあい交流の夏祭りなど多彩な取組が継続し、発展しています。

修学旅行生の受け入れ

植柳学区では、3年前から修学旅行生の受け入れを始めました。

きっかけは、旅行会社から旅館のおかみさんに、京都を体験する企画の相談が持ちかけられたことでした。地域では京都のことを良く知り、好きになってもらうことが、将来、観光客になることへつながるものとして、受け入れることとしました。

伝統工芸に触れてもらうことが中心ですが、西本願寺で新撰組が大砲を発砲した逸話など、地域の歴史にまつわる話に子どもたちは真剣に聞き入ります。当初協力してくれるお店は5、6軒でしたが、今年は36軒にまで増えました。

賑わいを取り戻し、生業を大切に 職住近接の地域づくりを

地域では、生業の問題を地域全体の課題として考えています。「昔は商売人が多かった。今は少なくなって、



植柳のまちなみ

お父さんがサラリーマンでお母さんも外で働いている、というような家庭が多くなっています。商売の方も一時ほどの賑わいがなく、商店街も少しずつ店が減ってきている状況になっています。このことは、地域全体にとって良くないことです。昔のような賑わいを取り戻して、地域で働く人を増やしていくことが必要です。そのことで、地域を見てくれる人が増え、地域が暮らしやすくなるように思っています」と森澤会長は話されます。

* * *

10年後20年後の地域の暮らしと生業のあり方を見据え、地域環境の維持向上を主体的に住民が担い維持発展させていく植柳学区のまちづくり。今後の更なる発展が本当に楽しみです。



植柳会 会長
森澤 富久造さん

地域のことを一緒にやっていけるボランティアをもっと増やしたいと思っています。昼食会についても、PTAのお母さんたちに手伝ってもらっていますが、今は50人くらいなので、一日一人として、365人くらいにしたいと思っています。

子供たちとの関係では、挨拶の方法だけを教えて、後は自由に遊んでもらっています。学区の多くの人と顔見知りとなり、植柳学区の子供となってもらいたいと思っています。子供さんに対しては時間がかかるけれど、ぼちぼちでもいいからと思ってやっています。色々見たり聞いたりしているうちに自然に、ボランティア精神や世の中の仕組みというものを覚えてもらおうとも思っています。

京のまちの今昔物語

撮影場所：三條小橋付近

(協力者：

大菅 直さん、白木 正俊さん)

高瀬川にかかる三條小橋。

この付近は、昭和5年に拡幅されました。昭和10年頃の写真では、現在と同じ欄干が確認できます。



昭和5年頃



昭和10年頃



現在

「京のまちの今昔物語」では、昔の写真から、現在の京都について考えることができればと思います。皆さんのお宅のアルバムに、かつての京都をしのぶ古い写真がありましたら、是非お貸しください。

お知恵拝借～

白杵デザイン会議

「白杵らしさに向けて、面白半分、命懸け」



長屋門を改修した喫茶店。地域の人が集います

歴史と自然に恵まれた、
白杵のまちづくり

大分県白杵市は、白杵湾に面した場的場ヶ浜干潟を持つ豊かな自然に恵まれた人口約3万7千人のまちです。国宝の白杵石仏は平安時代後期に彫られ、戦国時代は城下町として成長し、16世紀にはキリシタン大名の大友宗麟により現在に近い市街地が形成されました。このような歴史遺産と共に、醸造業のまちとして酒蔵や醤油蔵等が色を添え、個性豊かなまち並みを形成しています。

「白杵デザイン会議」は、大分県が昭和62年に進めた「地域デザイン運動」の中で発足したまちづくりグループです。まちの資源である蔵の実態調査や蔵を活用したイベントや市街地整備に向けての提案、「白杵百景」選定に向けた公募や写真展の開催、市内の古社寺や旧街道に花木を植栽する「史跡に花を咲かせよう運動」の実施、旧街道を歩く「歴史の道を歩く会」の開催等の幅広い取組を展開しています。

会員は、20から70歳代までの約40人で、自営業者や会社員、公務員、教員、職人、主婦、学生等様々な立場の人で構成されています。

「それぞれのメンバーが得意分野を持っており、計画をたてる人、宣伝する人、交渉する人、怒る人、なだめる人、と役割分担のもとに活動しています」と白杵デザイン

会議会長の戸真一さん。白杵デザイン会議では、まちに似合う建築を提案する「匠の会」、妖怪が住める「影」があるまちづくりを検討する「白杵ミウリークラブ」、地酒を愛飲することで町おこしを考へる「地酒を愛する会」

等のユニークな活動も活発です。

「白杵のまちづくりは『面白半分、命懸け』で取り組んでいます。同じ大分県の湯布院では、そのリーダー自らが先頭に立って働こうという心から『たすきがけの湯布院』と唱っていますが、私たちは生活に密着した取組なので、命を懸ける心を持ちつつ、楽しんで取り組もうという思いからです」と副会長の竹内義昭さん。

脈々と継承される、
白杵のまちづくり

白杵では、昭和30年頃から市民が自主的に文化的資源の調査活動を行ってきました。昭和40年代には工場の進出に対して「目先の経済発展よりも白杵の自然を守ろう」と、公害予防運動をしました。昭和50年頃には白杵の地域資源を後世に継承するために「歴史景観を守る会」ができました。「この頃までが、まちづくりの第1期ですね」と戸真会長。

「まちづくりの第2期は、干潟の保存活動をしました。自分たちで干潟の生態系を観察し、干潟がかけがえのない存在だと再認識しました。



干潟での生態調査

現在は第3期として、まち並みの保全活動をしています。白杵の景観は市民の生活態度が表れたものです。この生活態度を評価し、継承していく必要を感じています」「子ども達と一緒に取組も力を入れています。授業での白杵に関する学習だけでなく、一昨年開催した『全国町並みゼミ』では、小・中学生を中心とした子ども達の会議を行い、昨年開催した『日本ナショナルトラスト全国大会』でも小学生たちが分科会活動をしました。今後は、小・中学生だけでなく、高校生にも参加して欲しいですね。世代ごとにまちに関する感性がありますので、私たちが教えられることも多いんですよ」と戸真会長。



自然条件や建築は大きく改変せず、手入れを重ねながら次代に継承しているのがうかがえます

「私たちは純粋に白杵が好きだから取り組んでいます。これまでのまちづくりのそれぞれの時代のリーダーは、白杵のまちづくりに対する造詣の深い人たちばかりでした。私たちもその精神を受け継ぎ、後世に繋いでいきたいと思います。」

「私たちデザイン会議は、別名『で座飲怪議』とも言います。活動が終わった後は集まって、お酒を飲みながらワイワイやり、新しいアイデアなどを出し合います」と戸真会長。お互いの思いや夢を共有し、信頼関係を深めながら、楽しんで活動する。そしてその精神の継承をさりげなく行う。顔見知りの関係が構築されているコンパクトな白杵ならではの取組を拝見しました。

連絡先

白杵デザイン会議

e-mail: tuky@fat.coara.or.jp

京町家の保全・再生の事例

～人と家と通りとまちと～

山田・小堀邸(下京区麩屋町通松原上る)



京都四条の繁華街から南へと歩く。喧噪から少し遠ざかると、思いのほか低い家並みに出会う。その一角に、少し目をひく京町家がある。

中二階建ての1階、出格子部分にショーウィンドウが設けられ、飾られた花が目を楽しませる。いつ建てられたかは定かではない。江戸の末期か、明治に入ってからか。家族は昭和のはじめに引っ越してきた。山田・小堀邸は、山田さんの亡き父の実家であり、生家である。山田さんは仕事の関係で上京し、そのまま東京で暮らしていた。

山田さんが京都に帰ることを決めたのは、父が亡くなり、母が一人暮らしとなることがきっかけだった。一旦庭に降りないといけな母屋と離れの往復で、膝の悪い母に何かあれば心配だ。健康の基本である食生活に偏りが生じるかもしれない。ともかく、元気なうちに一緒に暮らすことで、病気になるまいよう気を付けたい。しかし、東京に母を呼んでも、知らない土地には馴染めないだろう。そう思った山田さんは、夫の協力を得て京都に帰ることにした。

同居するにあたって、マンションの購入も考えた。モデルルームを見ると母は満足するが、馴染みの店から遠くなることやエレベーターを嫌がり、なかなか決まらなかった。それに、マンションを購入すると、今の家は空いてしまう。この家を実家としている父の兄弟が元気なうちは、人手に渡すのはよくないと思っていた。思案の末、マンションを購入するのではなく、愛着のある生家を直そうと決意した。

100年以上経つ家。東京の住宅リフォームのセミナーに出てみたが、母と暮らす家の改修には参考にならない。改修することで、不安のない家をつくりたい、どうせ直すならしっかり直したかった。しかし、建築士や大工さんに知り合いはいない。平成11年暮れ、京町

家作事組の存在を知る。早速、お願いすることにした。実際に家を見に来てもらって、家の傷み具合や、暮らしについての考え方など、いろんな想いを伝えた。

いよいよ工事が始まる。柱が傾いていたため、建物の構造をしっかりと直した。間取は大きく変えていない。ただし、母屋と離れを廊下でつなぎ、バリアフリーにも心がけた。中庭を望む吹き抜けのダイニングキッチンには、天窓から柔らかな光が降り注ぐ。中庭はこれから夫が手を入れていく。

工事の際のエピソードがある。親子で「壁」について意見の食い違いがあった。山田さんの希望は、すすけた古い土壁の雰囲気を残して、必要などころだけ新しい土で修復するということだった。母はそれが嫌で、全て新しくしたかった。結局、山田さんの意見どおりになったが、今は訪れる多くの人が風合いのある壁のことを褒めてくれるので、母も段々納得してきているようだ。

もともと車庫にしていた1階の表の間

や物置としていた2階。今ではお客様を招く空間として生まれ変わり、訪問者を温かく迎える。元は車庫だった1階の玄関のたたきで、地域のみんながつくった作品の展示や、2階の和室で、彫金の個展や詩の朗読会、ライアの演奏会を試みたことがある。表のショーウィンドウに、夫の手がけた季節ごとの盆栽を飾る楽しみが増えた。今の暮らしに家族が満足している。

しばらく東京にいた山田さんは、京都の変化に敏感だ。京町家1軒1軒が手を入れていかないと、京都のまちを守っていけない。「うちの家ぐらいの町家で、直したらいい町家がいっぱいある。どなたでも来ていただいて、直るということを見ていただきたい」。

広々としたダイニングキッチンでは、友人が集まり、ホームパーティーを開く。家族一緒に楽しむ、人が集う家。暮らしを楽しみ、通りに表情を加える。人と家、家と通り、通りとまちの関係に気付かされた。



中庭を望むダイニング



客人を迎える玄関

地域まちづくりセミナー

「あなたのまちのまちづくり」

地域まちづくりの契機になることを目的に開催している「地域まちづくりセミナー」。平成13年度からは、まちづくりの意義や方法について学ぶセミナー「従来版」に加え、まちづくりの具体的な手法を学ぶセミナー「ステップアップ版」を開催してきました(第18号で紹介)。

今号では、上京区、中京区、下京区にある計6学区32名の方々にご参加いただき開催した「従来版『あなたのまちのまちづくり』」について、各学区で議論し、最終回で発表された内容を紹介します。

地域まちづくりセミナー取組経過

第1回 平成14年2月7日
まちづくりってなんだろう

～あのまちのまちづくりからお知恵拝借～

第2回 平成14年2月21日
わたしのまちはどんなまち?

～自分のまちの再発見～

第3回 平成14年3月7日
わたしのまちの暮らしづくり、まちづくり

～まちの資源を活かしながら考えるまちの将来～

第4回 平成14年3月20日
発表会「誇りを持ち、安心して生き生きと暮らし続けるために」

～議論した内容を発表し、今後のまちづくりについて考えよう～



発表内容

成逸学区(上京区)-----

「まちづくり」とはハード的なことだけでなく、日頃我々が行っている取組そのものなんだということに気付かされました。今後は、更に各種団体が連携を図りながら、横のつながりのある事業を展開していきたいと考えています。そして、2年後に小学校跡地に完成する養護学校をひとつの核にしながら、まちづくりを考えていきたいと思っています。

乾隆学区(上京区)-----

私たちの学区は40代～50代の比較的若い者が活発に活動していますが、これは、先輩方が努力されてきたおかげだということを改めて認識しま



した。しかし、まだ「まちづくり」においては、横の連携ができていません。自治連合会に主体的にコーディネートしてもらいながら、連携して議論できる組織や場をつくり、多様化している価値観を地域の多くの方と共有していきたいと考えています。

竹間学区(中京区)-----

まちづくりで一番大切なことは「人づくり」であるということを感じています。マンションに新たに住まれた方と、旧町内の方との交流を深めるということが、当たり前のことですが、なかなかできない状態です。繰り返し地域で会議を持つことで、お互いが信頼し合い、また協力し合いながら、人と人との交流を促進するための打開策が見つかればと思っています。

教業学区(中京区)-----

私たちのまちの将来像を考える「教業まちづくり特別委員会」の設置を地元へ帰って提言したいと思っています。自分たちのまちの将来を自分たちで考え、自分たちでまちをつかっていく、そして、自分たちの手でひとつひとつ進めていくとき、その協働作業がその地域の活性化につながる



と思います。住みやすいまち、なごみのまち、安心のまちとして後輩に引き継いでいきたいと考えています。

有隣学区(下京区)-----

私たちの学区の主要な課題は「小学校の跡地問題」と「マンション問題」です。その課題を解決するために、何ができるか議論を重ねた結果、3つの目標を考えました。それは「マンション住民とともに住めるまちづくり」「学区のみんなと京都市民に魅力のある跡地利用を考えるまちづくり」「学区住民が地域と関わっていると感じられるようなまちづくり」です。この目標の実現に向け、具体的な活動を進めていきたいと考えています。

菊浜学区(下京区)-----

菊浜学区は、北部はお茶屋さんのまち、南部は職人さんのまちと、異なった特色を持ち合わせた地域です。これをひとつにまとめ、良いところも悪いところも含めて、菊浜学区の特徴を多くの人に知っていただきたいと思っています。そのために、高瀬川や小学校の跡地にできる新しい施設を活かしながら、具体的な活動を進めていきたいと考えています。

* * *

各学区では、地域の特徴を活かした様々な議論が展開され、このような報告が行われました。

本セミナーを終え、いくつかの学区では新たなまちづくり活動が展開しています。センターは今後も、パートナーシップで進めるまちづくりの橋渡し役として、皆さんのまちづくり活動を応援していきたいと考えています。

京町家なんでも相談

これまでご紹介してきましたように、センターでは、平成13年9月から「京町家なんでも相談」を実施しています。具体的には、京町家に関する様々なご相談を受ける「京町家一般相談」、京町家の改修や活用などの相談に京町家専門相談員(大工・工務店、建築士、不動産事業者)が応じる「京町家専門相談」、さらに、京町家の活用や改修をテーマに、「京町家再生セミナー」を開催しており、京町家にお住まいの方や京町家をお持ちの方の悩みや不安の解消に向けて取り組んでいます。

スタート以来、平成14年3月までに、様々な方からのご相談が約300件ありました。このうち約3分の1は、京町家にお住まいの方や京町家をお持ちの方から寄せられています。それぞれの京町家を維持・継承していく上での改修や活用に関する具体的な内容のご相談が増えてきています。

そこで、センターではさらに多くの方々のご相談に応じられるよう、平成14年4月から「京町家なんでも相談」を一層充実して取り組んでいます。

毎月1回であった「京町家専門相談」の回数を月2回に増やし、毎月第2木曜日と第4木曜日(両日とも午後1時半から午後4時半まで)に実施しています。

併せて、「京町家再生セミナー」を隔月から毎月の開催

とし、平成14年5月から毎月第1木曜日(午後1時半~午後3時)に開催しています。これまでに、「京町家の活用事例と賃貸借の注意点(5/2)」、「京町家の普段の手入れと改修の心がまえ(6/6)」をテーマに実施し、参加された方からの熱心なご質問をいただくなど、真剣な学びの場となっています。(今後は7/4「定期借家制度と京町家の活用」、8/1「大工さんが語る『京町家の改修ポイント』」を予定しています)

今後ともセンターでは、京町家の居住者、所有者の方々をはじめ、市民活動団体や専門家、企業などの幅広い方々とのつながりを深め、京町家の保全・再生を支援していきます。



京町家再生セミナー

住民参加型まちづくりデータベース支援事業スタート!



地域住民の方々が主体となって行う地域まちづくりは、地域について知ることから始まる場合が多くあります。地域を知る有効な方法のひとつに、自分たちでまちの情報を収集し、地図を作成する方法がありますが、紙の地図では「簡単に書き直せない」、「多様な情報を書き込めない」、「折角収集した数々の情報を容易に蓄積、分類できず、必要なときに引き出せるものとして活かせない」など、限界があります。

こういった状況を踏まえ、センターでは、「住民参加型まちづくりデータベース支援事業」を開始します。この事業は、楽しみながら簡単に地図を作成し、地域のまちづくり情報をデータベース化することができる「まちづくりデータベースシステム(MDBS)」を地域のまちづくりに取り組む協議会等に貸し出すことにより、地域住民の方々の主体的なまちづくり活動を支援しようというものです。このシステムを利用していただき、皆さんの地域まちづくりがより効果的に促進されることを期待しています。

こういった状況を踏まえ、センターでは、「住民参加型まちづくりデータベース支援事業」を開始します。この事業は、楽しみながら簡単に地図を作成し、地域のまちづくり情報をデータベース化することができる「まちづくりデータベースシステム(MDBS)」を地域のまちづくりに取り組む協議会等に貸し出すことにより、地域住民の方々の主体的なまちづくり活動を支援しようというものです。このシステムを利用していただき、皆さんの地域まちづくりがより効果的に促進されることを期待しています。

まちづくりデータベースシステムの特徴

一つの敷地にいくつもの情報を書き込むことができます

簡単に、何度でも、修正することができます

必要な情報だけ表示することができます

簡単に集計し、グラフ化することができます

映写機を使えば、多くの人との情報の共有が簡単にできます

京都市のまちづくりの基本方針や都市計画関連の情報など、まちづくりに関する情報を見ることができます



『まちづくり交流』

～地域と共生する企業として～

京都ブライトンホテルの 地域交流

ホテルのシェフから小学生たちが料理を学ぶ、そんなユニークな地域との交流活動を行っている京都ブライトンホテルをご紹介します。

小学校での料理教室

京都ブライトンホテルでは、平成10年から新町小学校の生徒を対象に、夏休みに学校の調理室を使い、シェフが家庭でできる料理を手ほどきしています。フランス料理、中国料理、日本料理とテーマを決めて実施し、4回目となる昨年はフランス料理としてハンバーグをつくりました。今では6年生の家庭科の授業にも招かれ、今年は2月と3月に1回ずつ、2クラスの授業を受け持ちました。

手つきも真剣です



きっかけ

京都ブライトンホテルと新町小学校は中立売通をはさんで隣同士の関係にあります。総料理長の西村さんが何か地域に貢献できないかと考え、料理教室の開催を新町小学校に提案したところ、小学校の方でも地域社会の企業や人材の協力により、幅広い視点からの教育の充実を考えていたので、実現の運びとなったそうです。

地域と共生する企業

お話をうかがった京都ブライトンホテルの辻さんによると「御所の西という伝統ある場所で営業させていただいております。ホテルでは少しでも地域の発展や活性化の種になるような貢献ができればと考えています」とのことです。

「ホテルでは京都以外からお越しのお客様が多数おられます。こうしたお客様は、ホテルのサービスはもちろんのこと、周辺の環境も楽しみにお見えになります。この地域にあるブライトンホテルに泊まって本当に良かったという気持ちを持ってお帰りいただくことが重要です。このため朝、京都御苑を散歩するコースを案内したり、ホテル周辺地域の歴史も案内に取り入れるなど、立地している地域の良さをアピールしているそうです。



プロのシェフによる料理教室

人と人をつなぐリレー音楽祭

ホテルに入ると驚くのは6階まで吹き抜けになった開放的なアトリウムロビーです。毎年7月の1ヶ月間、気軽に本格的な音楽を楽しんでもらおうと、このアトリウムロビーを開放して、さまざまな音楽家が日替わりでコンサートを行う「リレー音楽祭」が開かれます。声楽や室内楽からオペラ、狂言など、国内外で活躍している音楽家の出演するこの音楽祭は、30分間ではありますが、入場無料で実施されていることもあり評判で、昨年は1ヶ月間で延べ1万人の方が訪れました。毎年来られるお客様のなかには、「一番響きがいいのはこの位置」などお気に入りの場所を見つけている方もいるそうです。音響を考えて設計したわけではないのですが、アトリウムロビーはなかなか響きがよく、通常のステージとは違った新しい演奏にもチャレンジできて、音楽家の方々にも喜ばれているそうです。

今年の夏ももちろん続いて行われるそうなので、楽しみです。

つながる活動へ

ブライトンホテルはグループとしても地域との交流を重視し、山科にあるホテルブライトンシティ山科でも近くの安朱小学校で新町小学校と同様の料理教室を行ったり、山科中学校・安祥寺中学校の生徒にホテルの裏方の仕事を体験してもらう勤労体験を行ったりしています。これらの活動が評価され、昨年9月には京都市教育委員会から京都ブライトンホテル、ホテルブライトンシティ山科それぞれの活動が表彰されました。

地域とともに活動する企業の取組が広がり、教育や福祉など様々な分野で地域と企業とが交流する場面が増えてきています。今回ご紹介しました京都ブライトンホテルのように、地域との交流がサービス業としての質のアップにつながるなど、地域と企業それぞれにメリットがあることが、活動を続けていく秘訣かもしれません。

夏の夜には30分だけのコンサートホールになります



まちづくり提案

京都ものづくり塾

京都は伝統産業から先端産業まで、全国でも有数の「ものづくり都市」です。観光都市のイメージが強いのですが、産業の中で製造業の占める割合が政令指定都市の中では川崎・北九州に次ぐ都市でもあります。

今回は、京都の「ものづくり」、特に伝統産業に焦点を当て、その作り手と使い手を結び、京都を盛り上げる活動を行う「京都ものづくり塾」を紹介します。

ものづくりからまちを考える

塾長の滋野浩毅さんは、以前は和装業界に勤めておられました。「和装業界の低迷であちこちの店が転廃業し、町中が寂しくなりました。個別の会社の力が無くなったというだけでなく、それとともに、地域が生み出してきた文化も無くなってきていると感じていました」と振り返ります。

地域の中で、ものづくり産業を活性化することで、まちを盛り上げようと、平成11年の京都市の「まちづくり塾支援事業」に応募したことが現在の活動のきっかけとなりました。

作り手（職人）と使い手を結ぶ活動

「一口にものづくりと言っても、ものづくり文化を担う職人がどんな人か、使い手である私たちは知らないし、職人にとっても使い手がどんなものを求めているかという情報は入りません」と滋野さん。「京都ものづくり塾」は、作り手である職人と使い手を結ぶ橋渡しをし、お互いの顔が見える関係と新しい「ものづくり」の仕組みをつくらうと、現在、約45名の塾生とともに、3つのワーキンググループで活動しています。



職人列伝の取材で工房を訪れる

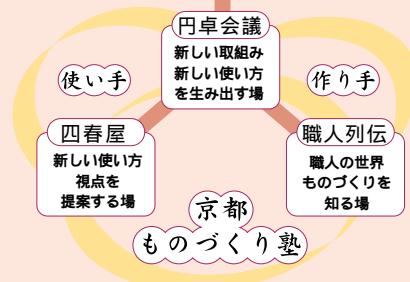
1つ目は、作り手にスポットをあてた「職人列伝」です。職人を知るために、その工房を訪れ、作品や仕事へのこだわり等を取材して、ホームページや会報で紹介しています。平成13年からは、「西陣プロジェクト」として、西陣界隈で活動している地域団体や、西陣織の関係者、活動団体などをつなぐ活動を始めました。

2つ目は、使い手にスポットをあてた「四春屋」です。伝統工芸品等に関する使い手のニーズを掘り起こし、使い手の視点を取り入れたものを企画して、できたものを実際に使ったり、販売したりしています。

そして3つ目に「ものづくり円卓会議」があります。職人と使い手がお互いの意見をやりとりし、認識の違いを明らかにしたり、新たなものづくりの仕組みを作り出す場として活動しています。

新たなものづくり文化の創造

伝統産業の活性化
和の暮らしの提案



活動から出たアイデア、事業へ

最初は職人と使い手の関係づくりと意見交流から始まった「ものづくり円卓会議」ですが、ここでの話し合いを活かして、実際の事業に取り組む話も進んでいます。インターネットで個別注文を受け、つくる過程で注文者と職人とがやりとりしながら実現する「注文生産の斡旋サービス」を行うというものです。消費者に伝統産業の実態を伝えると

同時に、職人とのやりとりの中で「ものができあがるまでの過程を楽しむ」というものづくり本来の楽しみを再発見してもらうことを目指しています。



ものづくり円卓会議の様子

「ここでできあがったものを、もう一回インターネットで見せて、同じようなニーズを持っている別の使い手にも還元していけたらと思っています」と塾生で、この企画のアイデア発案者でもある西本裕美さん。「これはひとつの観光モデルにもなるでしょう。職人さんは、話してみるといろんな意見をもっておられるし、その仕事場というのは入っていくとすごくおもしろいんです。自分の欲しいものができるだけでなく、個人的な体験ができるということは、大きな付加価値になると思います」と滋野さん。今後の展開にも夢が広がります。

* * *

敷居が高いと思われがちな伝統産業も、「もの」にこめられた想いを知り、作っている職人を知り、自ら体験することで愛着が生まれます。ものづくりを通じて、使い手と作り手との交流を進める「京都ものづくり塾」の活動が、「ものづくりの文化」を生み出した「まち」への愛着を深め、活気づけていくことに期待できそうです。

「まちづくり塾支援事業」

京都市のパートナーシップ推進室による「夢・ロマン・京都シティ」という事業で、市民から案を公募し、最長2カ年度、その活動のきっかけづくりとして支援が受けられるもの。

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。



有限会社京都旅企画
代表取締役 滑田 教夫さん

どんなことをされていますか？

大学の先生や異業種の方々、旅館業関係の方々から、様々なお知恵をいただくとともに、力を合わせ、従来にならぬ形で京都を体験できる旅行プランを提供しています。



具体的には、観光客の方々に、京野菜や京漬物に使われる「すぐき」に関して、栽培農家や生産農家に向き、土作りからの作り手としてのこだわりや、その歴史、健康食品としてのその効用などに触れていただく企画などがあります。また、舞妓さんと祇園と一緒に歩き、交流していただくとともに、京舞などの芸事と合わせて、歴史的、文化的なお話に触れていただくこともあります。

取組に関する学術的な話や、興味を引く話題などは、大学の先生方からお知恵をいただいております。

きっかけは？

私は、「祇をん新門荘」という旅館に勤めていますが、オフシーズンを何とかできないかと考えていました。京都全体がうまく生かされていないように思っていました。

「見る観光」では、暑さ寒さや、花や木などの季節に左右されます。そこで、いつでも来ていただける企

画ができないかと考え、平成12年度、大学コンソーシアム京都で行われている「京都企業家学校」に入りました。大学の先生と知り合い、京都のまちにはそこかしこに物語があることを知り驚きました。そういったことを生かして行きたいと思います。

企業家学校での新しい方々との出会いは、今までと違った切り口から京都の特性を生かした企画を生み出す原動力となっています。

企画の上で大切にしていることは？

単に何かを体験するのではなく、それぞれの意味や意義を知っていただくことに努めています。

祇園の舞妓さんは、京舞から、お茶やお花、書や画、能楽に至るまで様々な芸事について、厳しい教育を受けています。また、もてなしのための様々な作法を習得しています。しかし、そのことはあまり知られていません。祇園のことも「敷居が高い」などのイメージだけしか知られていません。そこで、初心者のための入門コースのようなものとして、舞妓さんと交流する企画を提供しています。

そのような企画も含め、京都のことを良く知ってもらうことや、魅力に触れていただくことは、京都のものを買っていただいたり、繰り返し京都に来ていただけることにつながり、京都の産業全体の活性化になるように思っています。

気配りをされている点は？

体験型の取組については、受け入れる側に過度の負担とならないよう注意しています。受け入れることで、直接、その商売につながる場合は良いですが、ボランティアとしてだけ、見学を受け入れていただく場合などは、あまり多くの人を受け入れてもらうと迷惑をかけることになってしまいます。

これからの課題は？

訪ねていく先の歴史や、その意味

や意義、訪問先でのマナーなどを分かりやすく伝えてくれる案内役としてのコーディネーターのような人が多く必要です。

京都は平安京に関わった人々のどのような思いで、どうしてできていったのか等、時代ごとのお話を分かりやすく説明してくれるような人も欲しいです。例えば、京都タワーに登って高いところから実際の京都を見ていただきながら話をしてもらう、などということができれば、もっと京都を実感していただけたらと思っています。

京都にあるボランティア団体等の方々のご協力をいただき、歴史を説明できるボランティアの方々などを増やしていければと思っています。

今後の展望は？

今年の夏は、昨年作った「歩いておくれやす祇園」というマップを使って、こだわりを持って生業をされている老舗の古物商や和菓子屋さんを巡り歩いて、お店の人と交流を持ってもらい、祇園や京都のことをもっと知ってもらう企画を、舞妓さんとの交流企画と合わせて考えています。また、伏見稲荷近くの和菓子屋さんにも連携をお願いしています。

そういった企画も合わせて、今後、もっとたくさんの企画を作っていきたいと思っています。そのため、さらに幅広い方々とパートナーの輪を広げ、お知恵やお力を合わせていきたいと思っています。先日の「第1回 京都まちづくり交流博」に集められた住民のまちづくり団体など、従来にならぬ新たな方々との連携もできればと考えています。



お問合せ先

TEL : 075-525-3425

URL : <http://www.kyoto-tk.co.jp/>

e-mail : kyototabikikaku@h9.dion.ne.jp

私と京都



オムロン株式会社
代表取締役社長
立石 義雄

「協創」～創造都市 へのルネッサンス～

今年4月、京都と関西文化学術研究都市の2地域が、大学や研究機関を中心とした技術革新と新産業創造を推進する「知的クラスター創成事業」の対象地域として文部科学省から選ばれました。前者は、私がこれまで育てられたまちであり、後者は、まちづくりの推進に貢献していこうとしている地域であり、心より喜ばしく思っています。

私は、かねてより高い文化・学術

を有する創造的都市は、その時代の産業に革新を起こすと考えています。私の好きなイタリアのルネッサンス都市、産業革命のイギリス、情報革命のシリコンバレー、大きな産業革新が生まれるまちには、多様な多彩な文化と知恵が集積されていたことが検証されています。

京都は多くのベンチャー企業を輩出し、元気なハイテク企業を擁する地域として注目されるように、この条件を満たす都市であります。開業率が廃業率を下回る産業の低迷も指摘されています。

いま、京都に何が必要かを考えると、京都の原点に戻ることが大切だと思います。つまり、京都は「閉じて、守り、保つ」まちではなく、多様な人が集まり、多様な知恵や文化が交わり、つねに新たな文化や産業の集積モデルを創造して発展してきました。それは、過去に対しても、未来に対しても「開き、挑み、発する」まちだからこそできたことだと思います。いまの京都を見渡すと、職人、観光客、学生、学者、僧侶、サラリーマンなど多様な人が集まっているにも関わらず、新たな産業集積のモデルの創造につながるような

交わりに活かしきれていないように思われます。

まちの元気には産業の元気が不可欠ですが、その産業構造は「何をつくるか」から「何を解決するか」への転換が求められています。これからは、20世紀の成長と発展の中での未解決のまま残された「忘れもの」、すなわち、環境、資源、エネルギー、廃棄物、食糧、教育、健康、安全、人権、福祉など、生きることの喜びを新たに享受できる生活文化をもつ社会を実現する上でのこれらの課題に対して、グローバルな視点とローカルな実践により、京都のモノ作りの伝統を活かしながら本質的な解決を進めるところに、新たな産業構造が築かれると考えています。

その実現には、行政、企業、NPO、市民などが、それぞれの特性や機能を活かし「協創」することが必要であり、そのようなポテンシャルは京都の歴史の中で培われてきました。今こそ、京都の生活文化と知恵の集積力を発揮し、創造都市として再び開花するチャンスであり、京都と関西文化学術研究都市のルネッサンスに貢献していきたいと考えています。

《センター解説アワー》

防災とまちづくり

「防災」には、物理的な環境の計画・整備等のハード面と、災害防止や対応のための活動等のソフト面の両面があります。これまでの日本の防災に関する取組は、どちらかという都市空間の安全化というハード面の取組に主眼が置かれてきたようですが、平成7年の阪神・淡路大震災において、日頃の住民同士の結び付きや町内情報の共有により救出活動や消火活動が迅速かつ確に行えたという事実から、それ以降防災に対する認識は変化し、ソフト面の取組が重要視されるようになりました。

しかし、現代社会では、生活が便利になり、地域での活動を行わなくても日常生活を営むことができる社会構造にあることなどから、地域コミュニティが希薄化しており、住民同士の結び付き、町内情報の共有など、日頃からの人間関係や近隣関係を築くことが困難になっています。むしろ、そういった関係を築くことを嫌う人もあります。とはいえ、例えば、

大災害時には、好むと好まざるとに関わらず、また、日頃のお付き合いがなくとも、地域住民が一丸となって災害に立ち向かい、対処していかなければなりません。

今、京都においても、コミュニティの希薄化を一つの課題とし、その課題を解決するために様々なまちづくり活動が行われています。「防災」は、日頃からまちへの愛着を持つとともに、地域ぐるみでまちの課題を解決するという精神や体制が不可欠になっており、こういった日頃のまちづくり活動との共存が重要だと言えます。

こういった地域への愛着や地域コミュニティは、「防災」という視点で考えると、非常に重要なことであると身近に感じることができますが、「防災」だけに限らず、あらゆるテーマにおいても重要であり、様々な活動が連携し、そして継続して行われてこそ、安心して、生き生きと暮らし続けるまちがつけられると言えるのではないのでしょうか。

センター語録

この4月から京都市景観・まちづくりセンターの職員となり、京都へやって来ました。二軒長屋の片側を借りて住み、毎日銭湯へ通っています。

この暮らしを始めてから、「まちの音」をよく耳にするようになりました。通りを走る車の音、お隣の家の階段を上がる音、屋根の上を猫が歩く音、銭湯で話し込む近所の人たちの声。それらの音を聞かたび、このまちに暮らしていることを実感します。

また、家の中でも様々な音がします。蛍光灯からは、かすかにジーツという音が聞こえ、水道管から水がもれていた時には、水滴の音で気が付きました。耳を澄まして聞こえてくる音一つ一つを確かめていると、家の様子やまちの様子がよく伝わってきます。布団の中にながら、「お

隣さんが庭に出て洗濯をしているな」と分かったり、また反対に「この連休は実家に帰っていたの？まったく物音がしないから・・・」などと言われることもあります。初めの頃はこのような近所付き合いの距離感に面食らうこともありましたが、会うたびに声を掛け合ううち、この関係を心強く感じるようになりました。

また、まちのことを知るにつれて、今まで聞いていた音も違って聞こえてきました。「どこかの犬が鳴いている」と雑音のように感じていたのが、「あの家の柴犬の声だ。散歩かな」と思うようになり、そうすると、まちが更に身近になった気がしました。これからも「まちの音」に耳を傾けながら毎日をごしたいと思っています。

(まちづくりセンター事務局 T・S)

京まちコーポ no.4



センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成14年度分)

平成14年度の賛助会員を募集しています。

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典]

- ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・冊子等センター発行物の割引
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会会費]

個人1口：5千円 団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

(財)京都市景観・まちづくりセンター

〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452 (元京都市立龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031 (支援・参加・人づくり)

FAX 075-212-4047

e-mail : kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月～金(祝日を除く)の9:00～17:00
来所される場合はなるべく事前にお電話ください。
なお、駐車場はありませんので地下鉄等をご利用ください。

